

令和2年度 厚生労働行政推進調査事業費補助金（慢性の痛み政策研究事業）  
分担研究報告書

慢性疼痛診療システムの均てん化と  
痛みセンター診療データベースの活用による医療向上を目指す研究

研究分担者 門司 晃 佐賀大学医学部附属病院精神神経科 教授

### 研究要旨

本研究の目的は、慢性痛及び難治性疼痛に対する学際的アプローチの有効性と必要性を明らかにするために、その介入効果を多面的に評価することである。そのために、iPad を用いた問診システムを構築し、慢性の痛みを主訴に受診した患者に対して、初診時と3か月後、6か月後、12か月後の4時点でNRS（直近24時間の最大、最小、平均の痛み）、PDAS（生活障害度）、HADS（不安・抑うつ）、PCS（破局的思考）、PSEQ（自己効力感）、EQ-5D（健康関連QOL）、AIS（不眠）、ロコモ25（運動機能）による評価を行った。その中で、今年度は初診時と3か月後で評価を行った18名に関して比較検討を行った。その結果、初診時と3か月後を比較してNRS（最大の痛み）とNRS（平均の痛み）において有意な改善が見られた。また、初診時のHADS（抑うつ）が3か月後の痛みの改善に影響を与える可能性が示唆された。本研究は4時点で評価する研究プロトコルとなっているため、全4時点で比較することで長期的な治療効果も検討ができるよう、今後も評価を継続していき、症例数を増やしていく必要がある。また、痛みを改善させる予測因子や成績不良例の危険因子についても検討する必要がある。

### A. 研究目的

慢性痛及び難治性疼痛の診療および研究においては、個々の疾患分野や医療職種に限定されない学際的なアプローチが求められている。佐賀大学医学部附属病院においては痛みセンターチームを組織し、痛みの緩和を専門とする麻酔科ペインクリニック医だけでなく整形外科医、神経内科医、精神科医、歯科口腔外科医さらには公認心理師、理学療法士も含めた多職種で学際的カンファレンスを月に1回行い、通常の診療システムでは治らない慢性痛患者の治療方針を決定している。

本研究では、慢性痛及び難治性疼痛に対する学際的アプローチの有効性と必要性を明らかにするために、その介入効果を多面的に定量化することを目的とする。

### B. 研究方法

対象者は、慢性的な痛みを主訴として当院の外来を受診した患者47名であった（男性14名、女性33名、47.6±18.9歳）。そして、対象者に対する介入効果を痛みだけでなく心理・社会面も含め多面的に評価した（初診時、3か月、6か月、12か月）。具体的には、痛みの強さの評価にはNRS（Numerical Rating Scale）を用いて直近24時間の最大、最小、

平均の痛みを、痛みに伴う生活障害の評価にはPDAS（Pain Disability Assessment Scale）を用い、不安・抑うつの評価にはHADS（Hospital Anxiety and Depression Scale）、痛みの破局的思考の評価にはPCS（Pain Catastrophizing Scale）、痛みに対する自己効力感の評価にはPSEQ（Pain Self-Efficacy Questionnaire）、健康関連QOLの指標としてはEQ-5D（EuroQol 5 Dimension）を用いた。さらに、不眠評価としてAIS（Athens Insomnia Scale）、運動機能評価としてロコモ25を用いた。また、評価の際にはiPadを用いた。

### 【倫理面への配慮】

本研究は、佐賀大学医学部附属病院臨床研究倫理審査委員会での承認を受けて実施し、研究の参加に関しては外来に研究内容を掲示し、参加を拒否できる機会を与えた。

また、回答にはiPadを用いたが、iPadでは回答の負担が大きい症例においては、紙媒体の質問紙でも回答できるように配慮した。

### C. 研究結果

対象者47名中で3か月後に評価ができた患者は18名、3か月後と6か月後でデータを取得できた患者は11名、3か月後、6か月後、

12 か月後すべてでデータを取得できた患者は7名だった。その中で、3 か月後に評価ができた18名に関して、t検定を行った結果、NRS（最大の痛み）とNRS（平均の痛み）に有意な改善がみられた（ $t(17)=3.37, p<.05, t(17)=2.49, p<.05$ ）。

また、NRS（平均の痛み）において改善群と不変群の2群に分け、その心理的要因に関してロジスティック回帰分析を行った結果、有意ではないが治療開始時のHADS（抑うつ）が高いほど治療による痛みの改善が得られない傾向が見られた（OR 0.57,  $p=0.086$ ）。

#### D. 考察

慢性痛及び難治性疼痛に対して学際的アプローチが有効であることが示唆される。また、成績不良因子として初診時のHADS（抑うつ）が高いことが推測される。ただし、今回の分析結果が初診時と3 か月後の評価の比較によるものであり、より長期的な効果を検討するためには6 か月後、12 か月後の評価との比較検討の必要性がある。

#### E. 結論

慢性痛及び難治性疼痛に対する学際的アプローチの有効性や初診時の抑うつ傾向がその後の治療成績に影響を与える可能性は示唆されたものの、長期的な効果や各要因の影響性は検討できていない。そのため、今後は全評価時点でデータを取得できたものが目標の15名に達するように対象数を増やしていき、検討を重ねる必要がある。

#### F. 健康危険情報

総括研究報告書にまとめて記載

#### G. 研究発表

##### 1.論文発表

なし

##### 2.学会発表

- 1) 宮崎春菜,平川奈緒美,塚本絵里,上村聡;  
大量の強オピオイドの離脱に成功した  
難治性疼痛の一例;日本ペインクリニック  
学会第54回学術集会. 2020.11.14-15.
- 2) 國武裕,上村聡子,松島淳,丸山暁人,小嶋  
亮平,平川奈緒美,門司晃; 多職種連携に  
よる家族関係の修復が有効だった慢性疼

痛の一例; 第49回日本慢性疼痛学会.  
2020.12.11-12.

- 3) 原野りか絵,平川奈緒美; 抑うつが併存  
した舌痛症患者において味覚障害の改善  
とともに舌痛が改善した症例—舌痛症と  
味覚障害—; 第50回日本慢性疼痛学会.  
2021.3.19-20.
- 4) 森啓輔,荒巻亮太,山下佳雄; 口腔顔面痛  
患者の臨床的検討; 第50回日本慢性疼  
痛学会. 2021.3.19-20.
- 5) 松島淳,國武裕,平川奈緒美,原野りか絵,  
門司晃; 慢性疼痛にディストラクション  
を用いる際の工夫; 第50回日本慢性疼  
痛学会. 2021.3.19-20.
- 6) 菊地潤,野上耕二郎,國武裕,門司晃; 口腔  
内セネストパチーにクロナゼパムとマイ  
ンドフルネス療法が奏功した1例; 第21  
回佐賀痛みを考える会. 2020.9.17.
- 7) 松島淳; 慢性疼痛治療における心理師の  
視点から心身医学の未来を考える（シン  
ポジウム 慢性疼痛治療の視点から心身  
医学の未来を見据える）; 第60回日本心  
身医学会九州地方会. 2021.1.31.

#### H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

##### 1.特許取得

なし

##### 2.実用新案登録

なし

##### 3.その他

なし